

最近10ヶ年間ニ於ケル滲出性肋膜炎ノ統計的觀察

京都帝國大學醫學部辻内科教室

大學院學生 醫學士 杉 本 英 一
大學院學生 醫學士 岡 谷 實

(昭和13年6月1日受領)

目 次

第1章 緒 論	4 沈 渣
第2章 一般統計	第3章 穿 刺
第1節 發生頻度	第1節 穿刺ノ方針
第2節 性 別	第2節 穿刺回数
第3節 年 齡	第3節 穿刺量
第4節 退院時轉歸	第4節 有熱期間中ニ行ヘル穿刺回数ト有熱日數
第5節 職 業	第5節 最初ノ穿刺ノ時期ト解熱マテニ行ヘル穿刺回数
第6節 結核性遺傳素因	第6節 穿刺ノ直接の影響ト穿刺病日
第7節 結核性既往症	第7節 最初ノ穿刺病日ト有熱日數
第8節 主 訴	第8節 最初ノ穿刺病日ト穿刺ヨリ解熱マテノ日數
第9節 發病ノ季節的關係	第9節 入院病日ト有熱日數
第10節 罹患側	第10節 穿刺ノ批判
第11節 誘 因	第4章 退院後ノ經過
第12節 榮養・體格・骨格	第1節 一般統計
第13節 合併症	第2節 結核性後發症ト穿刺トノ關係
第14節 赤血球沈降速度	第3節 解熱後結核性後發症發病マテノ期間
第15節 有熱期	第5章 總 括
第16節 血液像	主要文獻
第17節 滲出液	
1 色	
2 比重	
3 蛋白質	

第1章 緒 論

肋膜炎ハ多ク青少年ヲ侵シ、ソノ將來ノ運命ヲ歪曲スルコトニ於テ甚ダ寒心スベキ疾患ナリ。現時國民體位向上ノ叫バルル際ニ於テ、コレガ豫防的竝ニ治療の對策ヲ講ズルハ正ニ喫緊事ナ

リト云フベシ。

余等ハカカル見地ヨリ出發シテ、最近10ヶ年間ニ於テ我が辻内科ニ入院治療ヲ受ケタル滲出性肋膜炎患者ニ就キテ、ソノ發病ノ狀況、疾病ノ

經過、治療並ニ豫後ニ關シテ統計的ニ觀察シ、些カ本問題ニ答ヘントセリ。但シ合併症ヲ有スル症例ニツキテハ、ソノ合併症ガ肋膜炎ノ經過ヲ著シク至メ、或ハ遷延シ、爲ニ肋膜炎ノ經過ヲ觀察スルコトヲ困難ナラシムルガ如キモノハ、コレヲ省略セリ。殊ニ穿刺ノ治療的意義ニ關シテハ古クヨリ賛否兩論ニ分レテ未ダ決セラレザル有様ナルニ鑑ミ、特ニ此

ノ點ニ留意シ、我が辻内科ニ於テ、從來行ヒ來リタル治療方針ヲ統計的ニ檢討、批判ヲ加ヘント欲ス。尙退院後ノ經過ニツキテハ、一小部分ニ於テハ患者ニ就キ直接再検査ヲ行ヒ、大部分ノ患者ハ昭和13年2月中ニ於テ問合セテ行ヒ、返書ヲ得タルモノニツキテコレヲ觀察セリ。

第2章 一般統計

第1節 發生頻度

昭和3年初ヨリ昭和12年末ニ至ル滿10ヶ年間ニ於ケル我が辻内科入院患者總數ハ4776例ニシテ、肋膜炎患者ハコノ中560例ヲ占メ、ソノ入院患者總數ニ對スル比率ハ11.7%ニ達ス。コノ中合併症ノ著シカラザル滲出性肋膜炎患者ハ242例、肋膜炎患者總數ニ對シ43.2%ニ當レリ。合併症ノ著シカラザル乾性肋膜炎患者ハ22例、

3.9%ニシテ、肋膜炎患者ハ161例、28.8%ヲ占ム。肺ノ結核性病變ヲ主トシ、コレニ肋膜炎ヲ合併セルモノハ40例、7.1%ニシテ、非結核性病變ヲ主トシ、コレニ肋膜炎ヲ合併セルモノ33例、5.9%ヲ算ス。最後ニ癒着性肋膜炎患者ハ62例ニシテ11.1%ニ當レリ。

第2節 性別

上記合併症ノ著シカラザル滲出性肋膜炎患者242例ノ中、材料ノ整備セル225例ヲ選ビテ、

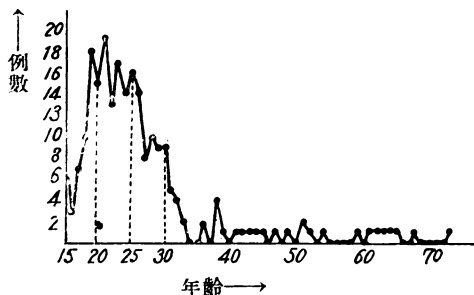
余等ノ觀察ノ對象トシタリシガ、コノ中男ハ153例(68%)女ハ72例(32%)ヲ占メタリ。

第3節 年齢

滲出性肋膜炎ハアラユル年齢ノ男女ヲ侵スガ如キモ、ソノ間自ラ好發スル年齢階層アリ。余等ノ統計ニヨレバ、第1圖ニ示ス如ク、18歳乃至30歳ニ多ク、殊ニ19歳乃至26歳ニ於テ最

モ多シ。

第1圖



第4節 退院時轉歸

死亡セル患者5例(2.2%)、多クハ老年ニテ衰弱ノ著シキモノナリ。事故ノ爲、未治退院セルモノ8例(3.6%)、ソノ他ハ大體良好ナル經過ヲ取り、退院時全治ト目サレタルモノ55例(23.1%)、輕快ト見ラレタルモノ160例(71.1%)ヲ算セリ。

第5節 職業

學生最モ多ク、商業、會社員、農業、看護婦、

店員ノ順序ニ次第ニ減少ス。詳細ニハ第1表ノ如シ。

第 1 表

	學生	商業	會社員	農業	看護婦	店員	教員	醫師	女中	運轉手	職工	影ハ師 刻繪 又甚	其他	ナ
男	例數 43	21	14	8	0	7	2	3	0	3	3	6	14	29
	% 28.1	13.7	9.2	5.2	0	4.6	1.3	2.0	0	2.0	2.0	3.9	9.2	19.0
女	例數 4	9	2	3	8	0	3	0	3	0	0	1	4	35
	% 5.6	12.5	2.8	4.2	11.1	0	4.2	0	4.2	0	0	1.4	5.6	48.6

第 6 節 結核性遺傳素因

結核性遺傳素因ヲ有スルモノ 70 例 (31.1%)、無キモノ 155 例 (68.9%) ナ算ス。

第 7 節 結核性既往症

既往ニ結核性疾患ヲ病ヒタルモノ、肺結核 14 例 (6.2%)、肋膜炎 20 例 (8.9%)、腹膜炎 4 例 (1.8%)、

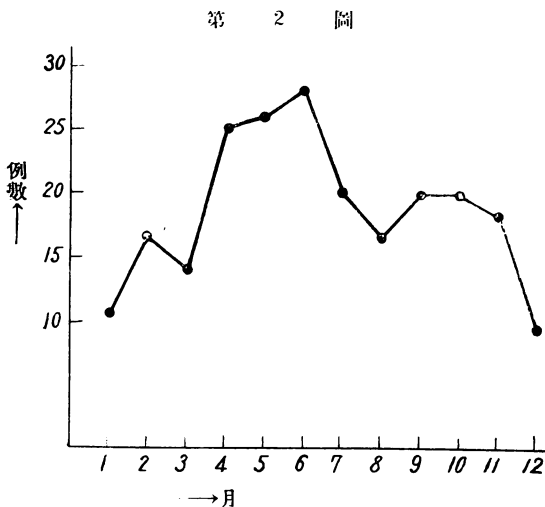
第 8 節 主 訴

胸痛竝ニ發熱最モ多ク、咳、倦怠感、呼吸困難之ニ次グ。列記セバ第 2 表ノ如シ。

第 2 表

	胸痛	發熱	咳嗽	倦怠感	呼吸困難	腹痛	食欲不振	頭痛	咯痰	背痛	心悸亢進	盜汗	惡感	瘦削	血痰
例 數	118	106	44	41	39	8	5	5	5	4	3	3	2	1	1
百分率	52.4	47.1	19.6	18.2	17.3	3.6	2.2	2.2	2.2	1.8	1.3	1.3	0.9	0.4	0.4

第 9 節 發病ノ季節的關係



滲出性肋膜炎ハ一般ニ四季ヲ選バズシテ發病スルガ如キモ、余等ノ統計ニヨレバ、圖表ニ示ス如ク、4、5、6ノ3ヶ月ニ最モ多發シ、ソノ數79例、平均1ヶ月26.3例ニ及ブ。7、8、9、10、11ノ5ヶ月ハ之ニ次ギ、ソノ數95例ニシテ平均1ヶ月19.0例ニ達ス。12、1、2、3ノ4ヶ月ハ最モ稀ニシテ、ソノ數51例、平均1ヶ月12.8例ナリ。即チ大體ニ於テ春季竝ニ初夏ニ最モ多ク、冬季ニ最モ少キヲ知ル。

第 10 節 罹患側

滲出液ノ右側ニ瀦溜セルモノ最モ多ク、113例 (50.2%)、左側ハ97例 (43.1%)ニシテ、兩側ニ

滯溜セルハ 15 例 (6.7%) ナリ。

第 11 節 誘 因

認め得ラルル最モ多キ誘因ハ過勞ニシテ、過激ニ次ギ、大多數ニ於テハ誘因ノ認めバキモノナル「スポーツ」、感冒、全身ヅブ濡レ、出産等ナシ。

第 3 表

	過勞	過激ナル「スポーツ」	感冒	ズブ濡レ	出産	胸部打撲	試験勉強	暴飲	徹夜	外科的術	軍役	下痢	急性腎炎	腎盂炎	關節「ロイマチス」	イマチス
例 數	26	5	4	4	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1
百分率	8.9	2.2	1.8	1.8	1.3	0.9	0.0	0.9	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4

第 12 節 榮養・體格・骨骼

榮養・體格・骨骼トモニ中等ナルモノ最モ多ク、不良乃至弱小ナルモノ最モ少シ。

第 4 表

榮 養	佳良	中等	不良	不明	體 格	大	中	小	不明	骨 骼	強	中等	弱	不明
例 數	70	93	60	2	例 數	68	146	9	2	例 數	69	129	25	2
百分率	31.1	41.3	26.7	0.9	百分率	30.2	64.9	4.0	0.9	百分率	30.7	53.7	11.1	0.9

第 13 節 合併症

緒論ニ於テ述べタル通り、重篤ナル合併症ハス用シタリシモ、尙輕微ナル合併症ノ存在ハコレベテ之ヲ除外シ、滲出性肋膜炎ガ臨牀上大體獨立ニ存在シ、獨自ノ經過ヲトルモノノミヲ探ラ否定スル能ハズ。コレヲ表示スレバ第 5 表ノ如シ。

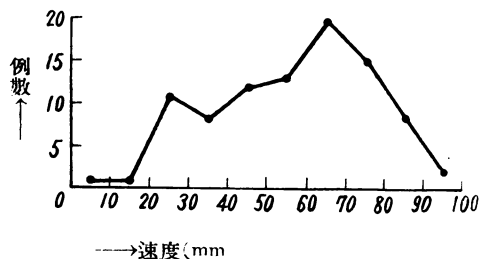
第 5 表

結核性疾患	病 名	肺 尖 浸 潤	癒著性肋膜炎	乾 性 肋 膜 炎	
	例 數	52	3	1	
	百 分 率	23.1	1.3	0.4	
非結核性疾患	病 名	脚 氣	妊 娠	膀 胱 炎	心 臟 瓣 膜 症
	例 數	13	6	3	2
	百 分 率	5.8	2.7	1.3	0.9
性 疾 患	病 名	微毒、甲狀腺腫、膽囊炎、糖尿病、氣管枝炎、腎盂炎、關節「ロイマチス」、筋痛、子宮筋腫、慢性腸加答兒、特發性食道擴張症			
	例 數	1			
	百 分 率	0.4			

第 14 節 赤血球沈降速度

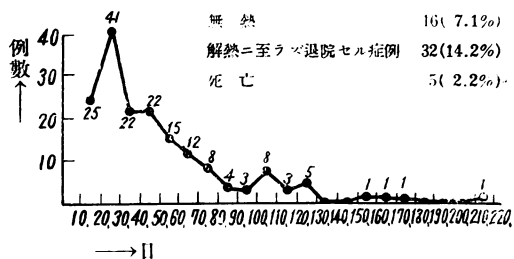
滲出性肋膜炎ニ於テハ一般ニ、赤血球沈降速度ハ著シク促進セラル。余等ノ統計ニ於テ、全例91例中、中等價 20 乃至 90 ノモノ大多數ヲ占メ、就

第 3 圖



中 60 乃至 70 ノモノ最モ多ク、全例ノ 22.0% ヲ占ム。コノ關係ヲ圖示セバ第 3 及第 4 圖ノ如シ。

第 4 圖



第 15 節 有熱期

無熱ニ終始セルモノ 16 例 (7.1%)、死亡セルモノ 5 例 (2.2%)、解熱ニ至ラズシテ退院セルモノ 32 例 (14.2%) カ除キ、入院中解熱ニ至リタル 172 例ニツキ、ソノ有熱期ヲ觀察スルニ、圖示ニ示

ス如ク大體 10 日乃至 130 日ニシテ、20 日乃至 30 日間ニ解熱ヲ示スモノ最モ多ク、大半ハ 10 日乃至 50 日間ニ解熱ヲ來スヲ見ル。

第 16 節 血液像

全患者ノ平均値ニヨリテ肋膜炎ニ於ケル血液像ノ動向ヲ檢スルニ、赤血球數竝ニ血色素量ニ於テ、男女トモ僅カナル減少ヲ見ル。白血球數ハ男女トモ正常値ノ範圍内ニアリ。中性多核白

血球ハ正常値ヨリ稍々低ク、「エオジン」嗜好白血球ハ正常値ノ範圍内ニアリ。之ニ反シ淋巴球及ビ大單核細胞ハ稍々高キ値ヲ示ス。

第 6 表

	性	例数	總 數	平 均
赤 血 球	♂	85	403,013.500	4,741.000
	♀	38	163,631.000	4,306.000
血 色 素 (サ ー リ)	♂	83	6.465	77.9%
	♀	38	2.595	68.3%
白 血 球	♂	84	657.552	7.829
	♀	38	282.213	7.427
中 性 多 核 白 血 球	♂	85	5,438.2	64.0%
	♀	37	2,354.3	63.6%
「エオジン」嗜 好 多 核 白 血 球	♂	85	222.3	2.6%
	♀	37	84.5	2.3%
淋 巴 球	♂	85	2,341.1	27.6%
	♀	37	1,035.9	28.0%
大 單 核 細 胞 十 移 行 型	♂	85	550.1	6.5%
	♀	37	217.3	5.9%

第 17 節 滲出液

1. 色

滲出液ハ淡黄色ヲ呈スルモノ最モ多ク (58.2%) 帶褐黄色、帶綠黄色ノモノ之ニ次ギ (何レモ 12.4%)、其ノ他帶赤黄色、赤褐色、血赤色、乳色ノ順ニ少數例宛存ス。

2. 比重

滲出液ノ比重 (攝氏 15 度) ハ 195 例中、最低ハ 1013 最高ハ 1035 一達スルモ、多クハ 1018 ト 1028 トノ間ニアリ、而シテ 1024 及ビ 1025 最モ多數ナリ。

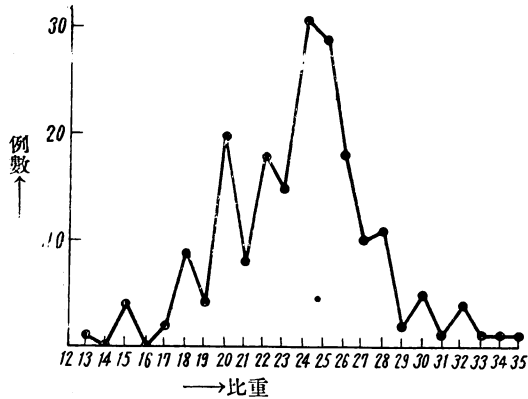
3. 蛋白質量

滲出液ノ蛋白質量ヲエスバツハ氏法ニヨリ測定スルニ、最低 1.5% ヨリ最高 10.0% ニ及ブモ、121

第 7 表

色	淡黄	帶褐黄	帶綠黄	帶赤	赤褐色	血赤	乳色	不明
例 數	131	28	22	17	12	5	1	3
百分率	58.2	12.4	12.4	7.6	5.3	2.2	0.4	1.3

第 5 圖

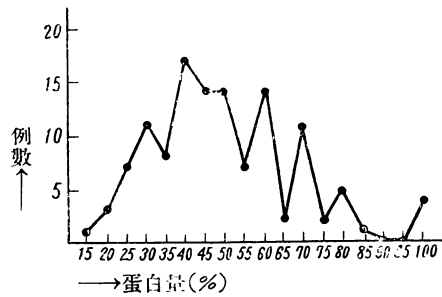


例中 81%ハ 3%乃至 7%ノ蛋白量ヲ示ス。而シテ 4%乃至 6%ノモノ最モ多シ。

4. 沈 渣

滲出液ヲ遠心沈澱シ、沈渣ヲ檢スルニ、表示ノ

第 6 圖



第 8 表

	淋巴球	白血球	赤血球	上皮細胞
大 量	17	0	14	1
中 量	54	13	62	0
小 量	68	47	80	0
微 量	29	104	25	42
ナシ	33	37	20	158

如ク淋巴球最モ大量ニ、赤血球之ニ次ギ、白血球ハ少量ニ存在ス。上皮細胞ハ微量ニ存在スル例僅カニ存スルノミニテ、大部分ニ於テハコレヲ缺ク。

第 3 章 穿 刺

第 1 節 穿 刺 ノ 方 針

從來我教室ニ於テハ、合併症ノ重篤ナラザル、殊ニ活動性肺結核ヲ有セザル滲出性肋膜炎ニ於テ、滲出液ノ相當大量ニ滯留セリト認メラルモノニハ、可成速カニ液ヲ排除スルノ方針ヲ持

ヒリ。斯ル方針ノ下ニ實際ニ穿刺ヲ行ヒタル症例ハ 199 例 (88.4%) ニシテ、試験穿刺ノ他ニハ穿刺ヲ行ハザリシ症例ハ 26 例 (11.6%) ニ達セリ。

第 2 節 穿 刺 回 數

穿刺回数ハ試験穿刺以外ニハ 1 度モ穿刺ヲ行ハザリシモノヨリ、前後 10 回ニ及ブモノニ至ル各階段存在スレドモ、1 回ノモノ最モ多ク、2 回、

3 回ノモノコレニ次グ。穿刺回数ハ全例ニ於テ 558 回ニ達シ、平均 2.5 回トナル。

第 9 表

穿刺回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
例 數	26	66	50	31	19	9	5	10	5	2	2
百分率	11.6	29.3	22.2	13.8	8.4	4.0	2.2	4.4	2.2	0.9	0.9

第 3 節 穿 刺 量

穿刺量ハ各例各回區々ニシテ、小ハ50ccヨリ大ハ2000ccニ至ル。穿刺量總計ハ275.650ccニ達シ、1回平均穿刺量ハ494ccニ相當ス。最モ屢：

行ハレタル穿刺量ハ500ccニシテ、ソノ前後ニ於テ比較的多シ。

第 10 表

穿刺量cc	例數	穿刺量cc	例數	穿刺量cc	例數	穿刺量cc	例數	穿刺量cc	例數
50	18	350	26	650	14	950	4	1250	1
100	27	400	41	700	21	1000	15	1300	2
150	34	450	27	750	18	1050	6	1400	3
200	38	500	60	800	29	1100	6	1500	6
250	31	550	20	850	5	1150	1	1600	3
300	30	600	49	900	14	1200	8	2000	1
計									558

第 4 節 有熱期間中ニ行ヘル穿刺回数ト有熱日數

有熱期間中ニ行ヘル穿刺ガ解熱ニ如何ナル影響ヲ及ボスカニツキ知ラント欲シ、先ツ有熱日數ト穿刺ノ回数トノ關係ヲ見ルニ、表示ノ如ク、穿刺ヲ行ハザリシモノ最モ早ク解熱シ、回数ノ加ハルト共ニ解熱ハ遅延ス。第一節ニテ述ベタ

ル如キ穿刺ノ方針ノ下ニ於テハ、滲出液ノ繰返シ瀧溜シ、從ツテ穿刺ヲ繰返シ行ヒタル症例ニ於テ、ソノ有熱期ノ長カルベキハ蓋シ當然ナリト云フベシ。

第 5 節 最初ノ穿刺時期ト解熱マデニ行ヘル穿刺回数

第 11 表

穿刺回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
例 數	19	63	35	21	14	6	4	3	2	2
有熱日數合計	689日	2664	1865	1081	990	287	235	296	210	152
同上平均	36.3日	42.3	53.3	51.5	70.7	47.8	58.8	98.7	105.0	76.0

第 12 表

初回穿刺病日	1—10	11—20	21—30	31—40	41—50	51以後	
穿 刺 回 數	I	21例	27例	6例	4例	1例	4例
	II	14	12	5	1	0	4
	III	6	8	4	3	0	0
	IV	2	7	3	2	0	0
	V	1	4	1	0	0	0
	VI	2	1	1	0	0	0
	VII	1	1	0	0	1	0
	VIII	0	2	0	0	0	0
	IX	1	1	0	0	0	0
穿刺回数合計	108	161	51	23	8	12	
例 數	48	63	20	10	2	8	
平均回数	2.3	2.6	2.6	2.3	4.0	1.5	

穿刺ヲ早期ニ行ヒタルカ、晩期ニ行ヒタルカニヨリテ、ソノ影響スル所異ルベキナリ。今コレト解熱ニ至ル迄ニ行ヘル穿刺ノ回数トノ關係ニツキテ見ルニ、例ヘバ發病10日迄ニ第1回ノ穿刺ヲ行ヒタル症例ハ48例アリ。ソノ各症例ノ有熱期間ニ於テ行ヒタル全穿刺回数ヲ合計セバ108回トナリテ、ソノ平均ハ2.3回、即チ第1回穿刺ヲ發病10日迄ニ行ヒタル症例ハ、解熱ニ至ル迄ノ間ニ平均2.3回ノ穿刺ヲ行ヒタリ。同様ノ計算ニヨリテ、ソノ後ニ第1回穿刺ヲ行ヒタル症例ヲ見ルニ、平均穿刺回数ハ次第ニ増加ノ傾向ヲ示ス。即チ早期ニ穿刺ヲ行ヒタルモノハ、遅レテ穿刺ヲ行ヒタルモノニ比シテ、穿刺回

數ハ少クテ濟ミ、從ツテ滲出液瀦溜ノ繰返シハ

早期ニ穿刺ヲ行ヒタル症例ニ於テ反ツテ少シ。

第6節 穿刺ノ直接的影響ト穿刺病日

穿刺ガ直接肋膜炎患者ニ如何ナル影響ヲ持ツカ
ーツキテ觀察セン爲一、一般自覺症狀呼吸、脈
搏、熱及ビ尿量ノ5項目ヲ捉へ、穿刺後1週間
以內ニ於テ、少クトモコレヲ中一ツニ著明ノ
輕快ヲ來セルモノ、著明ノ惡化ヲ來セルモノ、
著明ナル變化ナキモノノ3者ヲ比較セルニ、表

示ノ如ク、總計ニ於テ良好ナルモノ最モ多ク、
不變ナルモノコレニ次ギ、不良ナルモノ僅少ナ
リ。即チ一般ニ穿刺ニヨリテ患者ノ一般狀態ハ
輕快ニ赴ク、尙コレヲ穿刺ノ時期トノ關係ニツ
キテ見ルニ、早期ニ穿刺ヲ行ヒタルモノニ於テ
特ニ良好ナル影響ヲ認ム。

穿 刺 病 日		1—10	11—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61—70	71—80	81—90	91—100	101—以後	
影 響	良	例 數	35	114	27	21	8	4	1	3	3	11	227
		百分率	57.4	67.5	39.7	47.7	33.3	36.4	12.5	37.5	50.0	44.0	53.5
	不變	例 數	24	49	38	18	15	6	7	3	3	12	175
		百分率	39.4	29.0	55.9	40.9	62.5	54.5	87.5	37.5	50.0	48.0	41.3
	不良	例 數	2	6	3	5	1	1	0	2	0	2	2.2
		百分率	3.2	3.5	4.4	11.4	4.2	9.1	0	25.0	0	8.0	

第 13 表

第7節 最初ノ穿刺病日ト有熱日數

穿刺ガ解熱ニ及ボス影響ニツキテ、ソノ第1回
ノ穿刺ヲ行ヒタル病日トノ關係ニ於テ見ルニ、

表示ノ如ク、穿刺ヲ10日以內ニ行ヒタル場合ノ
例數ハ48例、ソノ有熱日數ノ合計ハ1740日ニ
シテ、平均36.3日ニ當ル。同様ニ11日乃至20
日ニ穿刺ヲ行ヒタル症例ニツキテ計算スルニ平均
48.0日ニシテ、前者ニ比シ頗ル延長シ、最初ノ
穿刺ノ更ニ遅レタルモノハ、更ニ解熱ガオソク
アラハルルコトヲ知ル、加之、10日以內ニ第1
回穿刺ヲ行ヒタル例ノ如キハ、穿刺ヲ行ハザリ
シ輕症例ニ比シテ、尙早ク解熱ス。コレヲ第3
節ノ穿刺ヲ行ハザルモノ最モ早ク解熱シ、穿刺
ノ回数ノ加ハルニ從ヒ、解熱ハ遷延スト云フニ
比較セバ、早期穿刺ノ效果ハ明カナルベシ。

第 14 表

最初ノ穿刺病日	例數	有熱日數 ノ合計	平均有 熱日數
穿刺ヲ行ハザリシ例	19	737	38.8
10日以內ニ穿刺セル例	48	1740	36.3
11日—20日	62	2973	48.0
21日—30日	21	1360	64.8
31日—40日	10	617	61.7
41日以後	9	1086	120.7
計	169	8513	50.4

第8節 最初ノ穿刺病日ト穿刺ヨリ解熱マデノ日數

第 15 表

最初ノ穿刺病日	例數	穿刺ヨリ解熱マ デノ日數合計	平均 日數
10日以內ニ穿刺セル例	48	1362	28.3
11日—20日	62	2113	34.1
21日—30日	21	828	39.4
31日—40日	18	268	26.8
41日以後	9	274	30.4
計	158	4845	30.7

早期ノ穿刺ガ有熱期間ヲ短縮スルコト、第6節
ニ述ベタル所ナリ。然ラバコノ第1回ノ穿刺後
ノ有熱日數ハ如何ト云フニ、表ノ如ク、10日以
內ニ最初ノ穿刺ヲ行ヒタル例ニ於テ最モ早ク解
熱シ來リ、20日以內ノモノ之ニ次ギ、30日以
內ノモノ更ニ遅ル。30日以後ノ穿刺ニ於テハ再
ビ短縮スト雖モ、全經過ハ前表ニヨリテ見ル如ク、
既ニ甚シク長シ。

第 9 節 入院病日ト有熱日數

轉ジテ入院病日ト解熱トノ關係ヲ見ルニ、表ノ

第 16 表

入院病日	症 例	有熱日 數合計	有熱日 數平均
1—10	78	2808	36.0
11—20	51	2591	50.8
21—30	26	1533	59.0
31—40	6	528	88.0
41以後	9	1104	122.7
計	170	8564	50.4

如ク、早期ニ入院セラルモノノ方、平均有熱期間ハ短ク、早期ニ入院治療ヲ受クルノ如何ニ肋膜炎ノ経過ニ好影響ヲ與フルカガ明カナリ。コノ際入院ニヨリ精神の竝ニ肉體的安靜ガ得ラレ、ソノ他、濕布、藥劑、看護ノ萬全ガ期セラレ、ソノ結果、肋膜炎ノ経過ガ短縮セラルルコト勿論ナリト雖モ、早期ニ行ハシタル穿刺ノ影響ガ與ツテカアルコト、前節ニ統計セル事實ニ徴シテ、明カナリト云フベシ。

第 10 節 穿刺ノ批判

穿刺ガ肋膜炎ノ治療ニ用ヒラレテヨリ既ニ久シク、ソノ治療の效果モ大體ニ於テ疑ヲ挾マザルガ如シト雖モ、尙且ソノ適應症ニ對シテハ異論ノアル所ニシテ、或ハ所謂 *Indicatio vitalis* 及ビ吸收ノ遲延セル場合ノ外ハ取ルベカラズト云ヒ、或ハ相當量ニ滯溜セルモノハ排除スベシト云ヒ、或ハ又早期穿刺ヲ稱揚スルモノアリテ、未ダ完全ナル一致ヲ見ザルガ如シ。

例ヘバ Alexander ハ滲出液ノ存在ハ免疫上竝ニ罹患臟器ノ安靜上有利ナリト云ヒ、壓迫症狀ノアル場合、液ガ全肋膜腔ヲ充塞セル場合ノ外ハ、急性期ニ於テハ穿刺ヲ行ハズ4乃至6週間後急性症狀ノ去レル後、尙滲出液ノ吸收サレザルトキニ限り、初メテ穿刺ヲ行フ可トスト云ヒ、Königer ハ外觀上續發的肋膜炎ノモノニハ穿刺ハ悪ク、原發性ノモノハ良シトナシ、原發性ノモノニ於テ第2週ノ終乃至第4週ノ初ヨリ屢々穿刺スルコトヲ勤ム。Meyerstein ハ中等度ノ滲出液ハ穿刺ヲ要セズ、大量ニ滯溜セル場合、初メテ適應症トナルト稱シ、Sylla モ姑息的療法ヲ推獎ス。Nyiri ハ多數ノ滲出性肋膜炎患者ヲ穿刺ヲ施シタル群ト、穿刺ヲ施サザル群トノ2群ニ分チ比較セシニ、ソノ経過ニ對シテハ兩者ノ間ニ差異ヲ認メザリシガ、肋膜ノ肥厚ハ肋膜癒著ヲ殘スモノハ穿刺群ニ多キヲ認

メタリト云フ。之ニ反シ、Schottmüller ノ如キハ、4分ノ1立以上ノ滲出液ハ特發性滲出性肋膜炎ニ於テ排除スベシト云ヒ、ソノ時期、回数、量ハ問フ所ニアラズト云フ。小西、古瀬モ亦、穿刺ノ治療の效果ヲミトメ得タリト云ヒ、岡村モ有熱期ニ於ケル穿刺ヲススモ、福島、武田、秋田モ大量ノ滲出液ハコレヲ排除スベシト云フ。余等ハ我が教室ニ於ケル最近10ヶ年間ノ滲出性肋膜炎ノ治療成績ヲ取りマツテ、上記ノ如キ統計的結果ヲ得タリ。但シ合併症ノ重キモノ、殊ニ活動性肺結核ヲ合併セル如キモノハスベテコレヲ除外セリ。即チ第5節ニヨリテ、穿刺ガ直接的ニ多數ノ患者ノ諸種ノ症候ニ好影響ヲモタラスコトハ明カナル所ニシテ、尙穿刺ノ時期的關係ニ關シテハ、早期ニ穿刺ヲ施ス方、有熱期ノ短キコト(第6節)、穿刺後ノ有熱日數ノ少キコト(第7節)早期ニ穿刺ヲ行ヒタルモノノ方、穿刺回數ガ少キコト(第4節)等ハ、滲出液ガ相當量滯溜セル場合ハ早期ニ之ヲ穿刺シテ反ツテ良好ナル結果ヲ來スコトヲ思ハシム。尙後章ニ述ブルガ如ク、穿刺ト豫後、殊ニ穿刺ノ時期ト回数ニ對スル結核性後發症トノ關係ニ特別ノ關聯ヲ見出シ得ザリシ事實ハ Nyiri ノ見解トハ反對ニ、穿刺ノ有効性ヲ物語ルモノナリト云フベシ。

第 4 章 退院後ノ経過 (遠隔成績)

第 1 節 一般統計

余等ガ対象トセル滲出性肋膜炎患者 225 例ニ對シ、昭和 13 年 2 月末一齊ニ問合セテ行ヒ、一部ハ直接再検査ヲ通ジ、大部分ハ得ラレタル回答ニヨリ、退院後ノ経過ヲ觀察セリ。カクテ觀察シ得タルモノ 109 例。ソノ中退院後結核性疾患ヲ得タルモノ 35 例、結核性疾患ヲ得ザルモノ

70 例、現在健康ナルモノ 80 例、靜養中ノモノ 7 例、治療中ノモノ 6 例、死亡 16 例ヲ見タリ。死亡例ノ中、結核性疾患一ヨルモノ 11 例、不明其他 5 例ヲ算セリ。詳シクハ表示スベシ。(第 17、18、19 表參照)

第 17 表

年度	患者總數	觀察例數	結核性後發症				現 在				死 因		
			有	無	不明	其他	健	靜養中	治療中	死亡	結核	不明	其他
昭和 3	14	5	3	2	0	0	3	0	0	2	2	0	0
4	21	6	2	3	1	0	3	0	0	3	2	1	0
5	19	8	1	6	1	0	5	0	1	2	0	1	1 (戰死)
6	28	9	4	5	0	0	7	0	1	1	1	0	0
7	20	8	3	5	0	0	6	0	0	2	2	0	0
8	26	15	6	8	1	0	13	0	0	2	1	1	0
9	23	10	2	7	0	1	8	0	0	2	1	0	1 (肺壞疽)
10	16	10	5	5	0	0	7	0	2	1	1	0	0
11	22	15	6	9	0	0	13	0	1	1	1	0	0
12	36	23	3	20	0	0	15	7	1	0	0	0	0
計	225	109	35	70	3	1	80	7	6	16	11	3	2
%			32.1	64.2	2.8	0.9	73.4	6.4	5.5	14.7	10.1	2.8	1.8

第 18 表

年 度	結核性後發症アルモノ		結核性後發症ナキモノ	
	例數	最初ノ穿刺日合計	例數	最初ノ穿刺日合計
3	3	31	2	61
4	2	32	3	62
5	1	0	6	62
6	4	62	5	119
7	3	42	5	80
8	6	42	8	108
9	2	36	7	151
10	5	137	5	87
11	6	100	9	110
12				
計	32	482	50	840
平均		15.0		16.4

第 19 表

	1 年以内	2 年以内	3 年以内	4 年以内	4 年以後	不 明	計
	喉 頭 結 核						
肺 結 核	6	1	2	2		3	14
肋 膜 炎	5	3	1		1	1	11
膿 胸		1					1
肋 腹 膜 炎	1					1	2
腹 膜 炎						1	1
膈 膜 炎	1						1
肋骨「カリエス」	1	1				1	3
脊椎「カリエス」	3		1	1			5
股 關 節 炎				1			1
計	17	6	4	4	1	8	40

第 2 節 結核性後發症ト穿刺トノ關係

穿刺ガ活動性肺結核ヲ有セザル滲出性肋膜炎ノ經過ニ好影響ヲ與フルコトハ、第 3 章ノ穿刺ノ統計ニヨリテ明カナリ。然ラバコレガ豫後ニ及ボス影響ハ如何。即チ結核性後發症ノアルモノト、結核性後發症ナキモノトノ 2 群ニ分チ、各ニツキ穿刺ノ狀態ヲ檢シタルニ、穿刺ヲ行ハザ

リシ症例ハ前者後者トモニ 4 例ヲ見、平均穿刺回数ハ、前者＝2.4 回、後者＝2.3 回ニシテホ、等シク、最初ノ穿刺日ノ關係ヲ見ルニ、前者ハ 15.0 日、後者ハ 16.4 日ニシテ、コレ亦大差ナシ。即チ一言ニシテ云ヘバ、結核性後發症ハ入院時行ヒタル穿刺ニハ大ナル關係ヲ有セズ。

第 3 節 解熱後結核性後發症發病マデノ期間

解熱後結核性後發症發病ニ至ルマデノ期間ヲ調査シタルニ、表示ノ如ク、解熱後 1 年以内ニ發病スルモノ最モ多ク、ソノ後急速ニソノ數ヲ減

ズ。疾病ノ種類ハ肺結核最モ多ク、肋膜炎之ニ次ギ、骨結核亦比較的多シ。

第 5 章 總 括

最近 10 ケ年間ニ我が辻内科一入院セル滲出性肋膜炎患者ノ中、合併症ノ重篤ナルモノ、殊ニ活動性肺結核ヲ合併セルモノヲ除キ、225 例ヲ得、コレラニツキテ諸種ノ統計的検査ヲ行ヒ、大約左記ノ如キ結果ヲ得タリ。

1. 年齢ハ 18 歳乃至 30 歳ニ多ク、殊ニ 19 歳乃至 26 歳ニ最モ多シ。

1. 主訴ハ胸痛最モ多ク、發熱之ニ次ギ、咳嗽、倦怠感、呼吸困難等ソノ次ニ位ス。

1. 發病ノ季節的關係ハ、4、5、6 月ニ最モ多ク、7、8、9、10、11 月之ニ次ギ、12、1、2、3 月ニ最モ稀ナリ。

1. 赤血球沈降速度ハ著シク促進サル。中等價 20 乃至 90 ノモノ大多數ヲ占メ、60 乃至 70 ノモノ最モ多シ。

1. 有熱期ハ大半ハ 10 日乃至 50 日ニシテ、20 日乃至 30 日間ニ解熱スルモノ最モ多シ。

1. 血液像ハ赤血球、血色素及ビ中性多核白血球ニ於テ僅カナル減少ヲ、淋巴球竝ニ大單核細胞ニ於テ稍々高キ値ヲ見タリ。

1. 滲出液ノ比重ハ多クハ 1018 ト 1028 トノ間ニアリ。尙 1024 及ビ 1025 最モ多シ、蛋白量ハ大抵 3 乃至 7%ノ間ニアリ。4 乃至 6%ノモノ

最モ多シ。

1. 穿刺ニ關シテハ特ニ考慮ヲ拂ヒ、各種ノ統計ヲ行ヒタリ。穿刺ヲ行ヒタルハ 199 例、行ハザリシ例ハ 26 例ナリ。

穿刺回数ハ全例ニ於テ 558 回ニ達シ、1 例ニツキ平均セバ 2.5 回ナリ。穿刺量ハ各例、各回區々ニシテ、50cc ヨリ 2000cc ニ至リ、1 回ノ平均穿刺量 494cc ニ相當ス。穿刺ガ直接ニ一般自覺症狀、呼吸、脈搏、熱竝ニ尿量ニ及ボス影響ヲ、穿刺後 1 週間以内ニ生ズル變化ニ求ムルニ、良好ナルモノ最モ多ク、不變ナルモノ之ニ次ギ、不良ナルモノ僅少ナリ。穿刺ノ時期的關係ハ一般ニ早期ニ行ヒタルモノノ方、良好ナル直接的影響ヲ與フルガ如シ。尙穿刺ノ時期ニツキ、解熱トノ關係ヲ調査セルニ早期ニ最初ノ穿刺ヲ行ヒタル症例ノ方、遅レテ穿刺ヲ行ヒタルモノニ比シ、解熱ガ早く來ルガ如シ。尙早期ニ最初ノ穿刺ヲ行ヒタル症例ハ、晚期ニ行ヒタルモノニ比シテ反リテ穿刺ノ全回数ニ於テ少シ。

コレラノ統計的事實ヨリ、余等ハカカル滲出性肋膜炎ニ對スル穿刺ノ治療的效果ヲミトメ、尙穿刺ノ時期的關係ニ於テハ、相當量ニ滲出液ノ滯溜セル場合ハ可成り早期ニ穿刺ヲ行ヒテ差支

ナカルベシト思惟ス。

1. 退院後ノ經過ニ關シテ、昭和13年2月中ニ問合セテ行ヒ、得タル回答竝ニ直接再診査ニヨリテ、諸種ノ觀察ヲ行ヒタリ。觀察例109、結核性疾患ヲ退院後得タルモノ35例、得ザルモノ70例、現在健康ナルモノ80例、死亡16例中、結核性疾患ニヨリテ死亡セルモノ11例ヲ算セリ。結核性後發症ト穿刺トノ關係ヲ見ルニ、大

ナル關係ナキガ如シ。尙結核性後發症ハ主トシテ肋膜炎ノ解熱後1年以内ニ發病シ、年ト共ニ減少ス。最モ多キハ肺結核、次デ肋膜炎ニシテ、骨結核モ比較的多シ。

以上

尙本統計ノ要旨ハ第16回日本結核病學會ニ於テ發表セリ。

摺筆ニ臨ミ終始懇篤ナル御指導ヲ賜ハリタル恩師辻教授ニ深謝ス。

主 要 文 獻

1) H. Alexander, Dtsch. Tuberkulose-Blatt 10 Jg. H. 2, S. 27(1936). 2) König, Dtsch. Kong. inn. Med. Wiesbaden. 1913, 412. 3) Meyerstein, Beitr. kl. Tbk. Bd. 24, 19. 4) Nyiri, Wien. Arch. inn. Med. Bd. 13, 35(1926). 5) Schottmüller, Münch. med. Wschr. Nr. 21,

S. 798(1933). 6) Sylla, Ergeb. d. ges. Med. Bd. 20(1935). 7) 小西, 結核. 15卷, 1442(1937). 8) 岡村, 北越醫學會雜誌. 39卷, 135(大正13年). 9) 古瀬, 十全會雜誌. 40卷, 2245(昭和10年). 10) 福島, 武田, 秋田, 大阪醫事新誌. 3卷, 1003(昭和7年).